

〈実践・調査報告〉

身体表現遊び「草むらごっこ」の 保育実践からの検討

平野 仁美
富山 幹子

1. はじめに

保育所は、生後57日目から保育を受け入れ小学校に入学するまでを過ごす場を提供している。ここで育つ約6年間で、子どもは人生を生き抜く土台をしっかり身につける。

保育者は本来ならば家庭で育つこの時期を引き受け、子育てを担っていくというある種の使命感を持ち日々保育を展開している。目の前の子どもは、五感が育つ大切な時期であることから、保育内容を通して自己以外のひとやものからの刺激を得て、身体機能のみならず多くの育ちを高める工夫をするのである。筆者は、子どもがその成長とともに、言葉や記憶や概念を獲得し、さらには、イメージをわかせる目の前にないものを思い浮かべることができるようになるまでの育ちを、からだところを柔軟にして動きと絡み合わせ自己の思いをあらわしたり、送ったりしながら表情の豊かさや動ける喜びが味わえるようになるという点に着目し、永年「身体表現遊び」の保育を実践してきた。そして、その1つの方法として「草むらごっこ」と名づけた身体表現遊びを提案してきた。

本稿は、2歳児クラスから5歳児クラスの子どもが「草むらごっこ」を実践したことから得られたものを検討・考察することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 実践期間：2010年7月～2013年2月

(2) 対象：愛知県豊川市立一宮保育園

2歳児クラスから5歳児クラス（各学年クラスごとに年2～3回実施）

（本園において、倫理的手続きをし、個人情報や肖像権に対しての許可を得ている）

(3) 保育方法：身体表現遊び「草むらごっこ」

この保育では、ダンボール・白ボールを土台に使い、草むらの絵を描いたものを椅子または、積み木などに貼り付けておく。草むら6個を円形に配置し草むらを囲む広場において身体表現活動を展開するものである。

・導入、展開部において草むらを意識的に活用し、身体表現遊びを行う。

保育実践者（平野）は、本園の保育者ではないため、子どもの育ちを確認しながら、テーマを持って表現遊びの内容を構成する。

・保育形態は、クラスの子みんな遊ぶことを前提にしている。

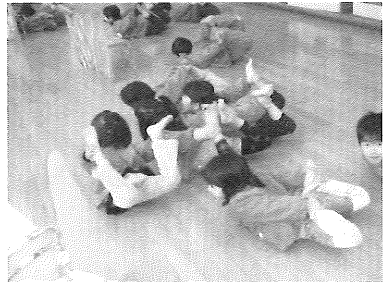
※担任ではない者が保育をするのでこの形態がよいと考えられる。

(4) 方法：実際の保育展開を観察した内容と録画したDVD映像をもとに検討する。

図1 「草むらごっこ」の保育場面



図2 「草むらごっこ」の保育場面



3. 「草むらごっこ」について

(1) 保育方法としての「草むらごっこ」

子どもが暮らす園という集団の場では、保育者によって様々な遊びが提供されている。「草むらごっこ」もそのなかの一つの遊びである。遊びは、子どもが自ら生み出すものと、保育者によって提供されるものがあると考えられる。そこには、保育者が遊びを提供する意図の向こうに、遊びを通して、子どもたちの発達する姿をたくさん確認することが出来るのである。

「草むらごっこ」は、領域「表現」のなかの身体表現の遊びとして、現場の保育者が身体表現の遊びに取組みやすい要素をたくさん盛り込んでいることが実践を通して確認できた。また、保育者の置かれている状況やその保育者の感性や豊かさが、子どものイメージや体験の記憶を自己の身体機能を使って楽しむ遊びへと誘うことができるのである。保育者はそこにかかわる、子どもの個性を温かく受け止め、子どもからの発信を今現在のその子の育ちと見取り、優しいまなざしで子どもの育ちを確認することが出来る遊びであると考えられる。

子どもは、草むらごっこを楽しむ中で、身体の揺り動かしや仲間からの刺激が得られる。また、自己の力を倍増させ自己実現や創意工夫後の爽快感を味わいながら身体機能をはじめとするさまざまな発達が見られるようになる。

そして、「草むらごっこ」による保育内容の工夫やおおむねの発達をおさえた言葉かけや遊びの展開は、子どもたちの発達にとって、大きな効果をもたらすものである。

「草むらごっこ」には、以上のような要素を多く含み子どもの育ちを支える保育方法の1つであることが考えられる。

(2) 保育環境としての「草むら」

「草むらごっこ」が誰でも、いつでも、どこでもできるのは、「草むら」の環境があるからである。

環境構成の3つの柱をあげ、「草むら」環境の位置づけの分類をすると以下に分けられる。

1) 「草むらごっこ」の物的環境

- ① 草むら……6～8個
- ② タンプリン、チューナータンプリン、効果音、カセットデッキ、ピアノ、キーボードなど
- ③ 新聞紙、布、ボール、人形、絵本など

①は、待避場所、夢を育む場所、思考する場所、友だちの動きを取り込む場所としての位置づけである。

②は、動きやすくする音響、リズムを取りやすくする打楽器、そのものになりきりやすい雰囲気を作り上げる意図的な効果である。

③は、表現が引き出しやすく、イメージをわかせる教材である。

2) 人的環境

- ① 保育者と一緒に遊ぶ友だちの姿は、表現を工夫したり、自己イメージを表したりしていく刺激となる環境である。
- ② 友だちが工夫して動いている姿であったり、動きを楽しそうにあらわす姿であったりが自己表現の工夫を誘う人的環境となる。

3) 空間の広がりや雰囲気という環境

- ① 草むらの置き方の工夫（草むらで取り囲む広場を設ける）で「草むら」の雰囲気を作る。
- ② 音や効果音によってなり切りやすい雰囲気をかもしだす。

③ 安心・安全の空間としての環境

①は、場所設定がかもしだしてくる「草むら」の雰囲気味わうことで、表現題材をあらわしやすくするものであると考えられる。

②は、動きやすい音の提供により身体を動かしたくなる雰囲気をかもしだすことである。

③は、命が守られ養護の行き届いた環境を保障することが身体表現の遊びにおいても必要であると考えられる。また、自分の居場所を保障し、落ちつきや安定を得られやすい場である。友だちの動きをみて取り込む創造の空間であり、楽しさを味わう基地としての役割があると考えられる。

(3) 発達過程を基盤にした「草むらごっこ」

1) 2歳児の発達過程を意識して行う展開

① 動ける身体を実感して遊ぶ

おおむね2歳児の発達の姿は、保育所保育指針第2章—2 発達過程(4)において、「歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。」と記載されている。また、「発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の思考や欲求を言葉で表出できるようになる。」とか「盛んに模倣し、物事間の共通性を見いだすことができるようになる」とともに、象徴機能の発達により、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる。」と述べられている。

上記のような発達の姿を意識したとき、「草むらごっこ」では、動ける身体を実感して遊ぶ保育展開を組み立てることが必要である。

② 草むらごっこの展開のポイント

発達過程の内容を意識して、2歳児の保育の組み立てを考えると、歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能の発達が、動ける喜びに繋がることだと理解できる。草むらの出入りを中心に、身体をたくさん動かして遊ぶ心地よさが味わえる内容を工夫することが必要である。

この時、あまり複雑ではない簡単な動きを繰り返すことで、確実に身体機能が高まっていけると考えられる。わかりやすく、確実に動くことで、動ける身体を子ども自身が実感していくことが大事である。

動きと合わせて、言葉を繰り返し聞き、自分のすることが明確になっていくのである。このことが、自我の育ちを支え、模倣して取り込み、切り替えて外に出す面白さを知り、受け止めてもらえることが象徴機能を発達させていくのであると考えられる。心を開放させて、思う存分動く楽しさを味わわせていくのに「草むらごっこ」は大きな効果がある。

2) 3歳児の発達過程を意識して行う展開

① “みたて”と繰り返しの遊び

おおむね3歳児の発達の姿は、保育所保育指針第2章—2 発達過程(5)において、「基本的な運動機能が伸び、それに伴い、食事、排泄、衣類の着脱などもほぼ自立できるようになる。話し言葉の基礎ができて、盛んに質問するなど知的興味や関心が高まる。」と記載されている。また、「大人の行動や日常生活において経験したことをごっこ遊びに取り入れたり、象徴機能や観察力を発揮して、遊びの内容に発展性が見られるようになる。予想や意図、期待を持って行動できるようになる。」と述べられている。このような発達の姿を意識したとき、「草むらごっこ」では、みたてと繰り返しの遊びを保育展開の中に組み入れることが必要である。

② 草むらごっこの展開のポイント

象徴機能の発達を意識して“みたて”“つもり”の世界を楽しむのに“「草むら」に住んでいるもの、隠れているもの”が広場に遊びにきては、「草むら」にもどる。次に、「草むら」から遊びに来たものは違うものになって出てくる。みたてと繰り返しの遊びは、この時期の

子どもが遊びを楽しむ要素として必要不可欠だと考えられる。

3) 4歳児の発達過程を意識して行う展開

① 経験の再現と再統合を意識して

おおむね4歳児の発達の姿は、保育所保育指針第2章—2 発達過程(6)において、「全身のバランスを取る能力が発達し、体の動きが巧みになる。自然など身近な環境に積極的関わり、様々な物の特性を知り、それらとの関わり方や遊び方を体得していく。」と記され、「自分の行動やその結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験する。仲間とのつながりが強くなる中で、けんかも増えてくる。その一方で、決まりの大切さに気付き、守ろうとするようになる。感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになってくる。」と述べられている。このような発達の姿を意識したとき、「草むらごっこ」では、経験の再現と再統合を意識して保育展開を組み立てることが必要であることが考えられる。

② 草むらごっこの展開のポイント

この時期、経験の再現と再統合を意識し、身体表現の遊び展開を考えると、4歳児の目が輝き、集中する姿や動きの工夫が見られるようになるのである。また、みんなと一緒にする遊びや保育者の投げかけに耳を傾け、考えたり、工夫したりしながら自分の身体を十分使って表現しようとする姿が現れることが確認できた。

自己の育ちの体験と結びつく題材は、イメージがわき、友だちの動きを取り込んで、自分の動きに変化をつける手がかりにもなる。また、表現題材の選択を子どもに委ねることもできるようになる。子どもが遊ぶさまざまな場面で、動く喜びや身体で現す面白さ、人や物にかかわる喜びを感じる心が育つための条件をそろえることが表現を豊かにしていくことにつながると考えられる。

4) 5歳児の発達過程を意識して行う展開

① オノマトペを用いた動きの表現

おおむね5歳児の発達の姿は、保育所保育指針第2章—2 発達過程(7)において、「運動機能はますます伸び、喜んで運動遊びをしたり、仲間とともに活発に遊ぶ。言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。」と記されており、「自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたり」さらには「仲間の中の一人としての自覚が生まれる。」と述べている。

また、おおむね6歳児の発達の姿は、保育所保育指針第2章—2 発達過程(8)において、「全身運動が滑らかでたくみになり、快活に跳び回るようになる。これまでの体験から、自信や、予想や見通しを立てる力が育ち、心身ともに力があふれ、意欲が旺盛になる。」と述べ、さらには「様々な知識や経験を生かし、創意工夫を重ね、遊びを発展させる。思考力や認知力も高まり、自然事象や社会事象、文字などへの興味や関心も深まっていく。」などの育ちをあげている。

上記のような発達の姿を意識したとき、「草むらごっこ」では、オノマトペを用いた動きの表現を意識して保育展開を組み立てることが必要であり、オノマトペの投げかけを中心とする保育展開は、保育者の余分な言葉かけをさげ、子ども自身が言葉を受けとめ、感じ、考える状態を提示し、言葉の持つ感覚と動きのマッチングにより、動く喜びを倍増させていることが確認できた。そこには、自分から、〇〇する主体性が「草むらごっこ」を通して身についていく瞬間をみることが出来た。

② 草むらごっこの展開のポイント

この時期の子どもたちの旺盛な好奇や意欲、思考力や認識力の高ま

り、自然事象や社会事象への興味関心の深まりを意識した題材の選定は、遊びの楽しさをより実感できるものとしていくと考えられる。

言葉が巧みに使えるようになり、言葉からイメージをわかせる、自己の身体を思う存分使って、投げかけられた題材を表現しようとするのがこの時期の子どもたちの姿である。また、見たこともないものや感覚的に知っているものや形に表すのが難しいものでも、自分なりに工夫して表すことができるようになることが確認できた。子どもだからこそその感覚を持っていて、大人では表せないようなものでも、さらっと難なく、あらわしてしまうこともあり保育中にとっても感動したり、驚かされたりする場面にたびたび遭遇するものである。

「草むら」があることで、子どもならではの柔軟な考えや面白い動きに出会え、その子らしい工夫が発見できるのである。そして、子どものこんな面を大いに生かして身体表現の遊びにしてみたのが、オノマトペを用いた動きの表現だと考える。擬音語を空想して動きに置き換える時、私の動きのあらわしが発見できる瞬間であると共に、子どもからの動きの発信を楽しみにしながら食い入るようになってしまう保育者の期待を発見できた。ここでは、動きが変化していく時の場面転換や動きのマンネリ化を回避する時のきっかけに「草むら」を使うと効果がある。

「草むら」の魅力は、奥深く多様である。「草むら」を設定することにより、表現を紡ぎだす魔法の庭が出来あがるのであると考えられる。年長児になると概念も育ってきて、「こうあらねばならない」「これは、こういうものだ」等と、現実から離れられない子や想像の世界で遊べない子の存在にも出会うことがしばしばある。そんな場面では、「草むら」があることで、このタイプの子はずいぶん気楽に遊びへの参加ができるようになることが考えられる。

「草むら」は、他児の動きを取り込む観察基地として存在し、現実

図3 「草むらごっこ」の保育場面



図4 「草むらごっこ」の保育場面



世界から虚構世界へ、“行きつ、もどりつ”して多くのことをメルヘンの世界に誘いながら、遊びを楽しめる効果がある。心と身体と頭の調整をとってくれる場所としての役割を果たすことになるのである。「草むら」が基地となり、自己の感覚で、あらわした動きを誰からも否定されない、何でも有りの動きの楽しみ方を「草むら」から登場することによって子どもは味わえるのである。このような場面では、自分らしい動きの表出や創造する動きの工夫ができる。「草むら」の存在に支えられる子どもがいることを理解して保育展開を工夫するとよい。

4. 「草むらごっこ」の実践からの検討

前章において「草むらごっこ」が子どもの身体表現を豊かにする遊び内容であることを述べてきた。本園において「草むらごっこ」の実践活動を始めたのは、2010年7月からである。子どもたちの変化を通して、身体表現遊びが子どもの育ちを総合的に支える内容であり、「草むら」を環境として使うことで表現を展開する抛りどころ、動きを工夫したり取り込んだりする基地的な役割を担っていることがわかった。

2013年2月までの実践をもとに検討・考察結果を以下に述べる。

(1) 環境としての「草むら」

「草むら」は、表現を引き出す環境として子どもの思いを自在に発揮する基地となる。また、どこにでも移動してすぐに遊びだせるというメリットがある。そして、「草むら」を拠点として、さまざまなものになりきる(変身する)ことができる。遊びの必要に応じて位置取りを変化することができ保育を展開する環境が作りやすい。表現をはじめて体験をする子どもにも抵抗のない環境を提供できることから非常に使い勝手がよいことが確認できた。さらに、表現が滞り面白くないと子どもが感じたとき、「草むら」にもどることによって、動きを変化したり、工夫したり、考えたりできる居場所の提供になるのである。また、子どもの動きが活発になると、把握しきれず保育の方向が保育者の意図とズレ出してしまうと感じることがある。こんなとき、保育者は「草むら」を活用するとよいことが実践の繰り返しの中で実感できた。

一度子どもを「草むら」にもどし、子どもの気持ちをしずめたり、休息を取らせたりしながら保育者は子どもをよく観察し、次の展開を考えたり工夫したり、気持ちを切り替える必要が保育者側にもある。保育のゆくえを確認したり、整理したりするとき「草むら」を活用すると、保育を見失わずに展開できると考えられる。

「草むら」環境は、表現する子ども側にとっても、表現を引き出す側の保育者にとっても使い方しだいでさまざまな効果を内在した環境であることが考えられる。

以下に、「草むら」を使って表現遊びをしたとき見られた年齢ごとの効果を検討した結果を記載しておく。

1) 2歳児に見られる「草むら」環境の効果

2歳児は、言葉の獲得により、イメージがわき、思い出しや思い浮かべができるようになると自己の身体を使って“イメージしたもの”をあらわ

すことができるようになると考える。「草むら」の設定は、簡単な追いかけてこやなりきり遊びを楽しむのに効果がある。「草むら」があると、追いかけられたとき逃げ込む拠点目標ができ、どこに行けばよいか分かりやすくなるのである。安心して遊べることは、遊びを楽しむ条件の1つである。

表現活動のスタートは、“なにか”をあらわす題材を投げかけ、“なにか”をあらわさなくてもよいのである。自己の身体を動かすことが楽しいと感じることからはじめ、それをたくさん体験することで“楽しい”という心情や感覚を味わっていくことが後の身体表現遊びを豊にできるのだと考える。

“なにか”になりきって遊ぶとき、目に見えないが脳裏に浮かぶイメージを自分の身体であらわしていくのであるが、2歳児の生活体験から引っ張り出すイメージは、まだまだ未熟であるため、目に見える「草むら」環境があることで、目標物ができ、遊びがわかりやすくなるのである。2歳児の保育では、“わかりやすい”をたくさん目の前に提示することが保育を楽しむ方法の必要不可欠な条件であると考え。「草むら」の出入りを繰り返すことを中心におき、知っているものが付加され、身体表現遊びが成立するのである。

2) 3歳児に見られる草むら環境の効果

3歳児は、繰り返しが面白いと感じ、「草むら」からの出入りが楽しめるようになる。「草むら」があることで、安全基地的な役割を担い、動き題材を切り替えやすい効果がある。イメージがわかりやすい動物や虫などの住み家として、「草むら」は表現を豊に引き出せる効果を内在しているのである。

この時期、動くことを楽しみ自分なりの表現をすることや保育者の言葉かけを聞き、題材のイメージをわかせて動きをあらわしてくることが保育

のねらいとしてあげられる。そのねらいを達成するとき、環境である「草むら」の効果が発揮されるのである。

3) 4歳児に見られる草むら環境の効果

4歳児にとって「草むら」は、友だちの動きを取り込む場となる。表現をより豊かに工夫する時期には、「草むら」を基地として、見たり、考えたりし、動き出すきっかけや次への切り替えを行う。

また、自分の考えがまとまるまで「草むら」を居場所として使う。安定して、焦らず、工夫し、表出するのを待つ場としての効果がある。動き出しのゆっくりした子にとっては、保育者の目を気にせずに自己の動きを考えたり、休息をとったり、しながら心を安定させる場所としての効果もある。

さらに、仲間と関係を取り結び、協同の動きを作り出せる場所として効果をあらわす環境である。

4歳児くらいになると、友だちの動きも気になる。動き出しに時間を要する子へ指摘をする子も現れるが、「草むら」があることで、友だちのこのような動きに気を捉われる子が少ないことが実践をDVDでもう一度見ることでわかった。個々の子どもの発達を守るのにも「草むら」環境は効果がある。

4) 5歳児に見られる草むら環境の効果

草むらは、活用の仕方でも子どもがつくり出すストーリーを楽しめるようになる。動きを工夫する時や切り替えて変化する場として活用効果がある。

例えば、忍者表現では、変身修行を楽しむ場としての役割を果たすことも多分にある。また、速い動きを組み立てる拠点としての活用効果も十分ある。

自分の脳と交信できる発達を身につけたことを友だちとの交流の中で実

感していく5歳児は、「草むら」の組み換えを自分たちで工夫し、身体へのあらし場面でのこの環境を多に利用する姿がみられる。このことは、言葉を理解し、認知を基盤にイメージをわかせる、よく動ける身体機能を子どもが獲得した状態であると考えられる。これらを獲得していく途上での「草むら」の役割は大きく、子どもの思考を増していく拠点として、草むらの効果は十分必要である。

(2) 「草むらごっこ」の表現題材

「草むら」を環境として保育を実践するときも、まず部分案の立案から行う。その保育が実践展開される時期はいつなのか、何歳児がどのように「草むらごっこ」を体験するのかで表現題材を決定していくのである。表現題材によって、遊びが楽しめない子どもでき、保育効果も半減してしまう結果になる。年齢に適した表現題材の選定は重要である。

以下に、季節（実施月）・年齢ごとのテーマを「草むらごっこ」の実践をもとにあげ、考察する。

表1 表現の題材

表内文字	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
4月		ピョン・ピョン・ ピタ	たまご ころがる かくれる	だんご虫 たまごの中から ころころ
5月		ピョンピョン・ ゴロゴロ・ドチン	だんご虫 カエル へび 蝶々	カエル 新聞紙 ふわふわ もちもち
6月		ジャンプ まんまる のびのび	そおっとはやく	紙になる 布になる もこもこ
7月		だんご虫 カエル うきぎ	たまごのなかから ごろごろ	忍者 ふうせん 粘土
8月		草むらかくれんぼ 踊って	草むら動物園 まんまる	がちゃがちゃ どんどん

身体表現遊び「草むらごっこ」の保育実践からの検討

9月	ビヨンビヨン・ ゴロゴロ・ドチン	バッタ うさぎ へび	絵本から 「ぶちぶち」 「ころちゃん」	不思議なナイフ どろどろ
10月	走れ走れ	草むら動物園	風船フワフワ ぶちぶち	紙飛行機 オノマトペで動く
11月	広場で踊る	だんご虫ごっこ	風が吹いてきた	木の葉のたび
12月	草むらかくれんぼ	もちもち ころころ	跳ぶ・転がる・ 跳ねる	探検遊び
1月	あおむし だんご虫 カエル うさぎ	うさぎ ふた たぬき あおむし	ボール 新聞紙 こま	氷る 溶ける 風 雪
2月	ごろごろどかーん	模倣して動く まわる ボール	氷る 溶ける フワフワ ヒラヒラ	曲の感じてうごく ザラザラ シーン
3月	おおかみさん	たまごのなかから 跳ぶ・つく・跳ね る	オノマトペで動く 曲の感じてうごく	お話づくり (○○の旅・○○の 一生など)

1) 2歳児の表現題材の検討および考察

本研究において、2歳児が「草むらごっこ」を開始するのは9月頃からである。この時期とする意図は、保育者の言葉かけから動くイメージをわかさせ、その子なりの動きをあらわすこの遊びでは、言葉の発達や物への認知力、体験からの記憶がかなり必要となる。また、担当の保育者との関係を密にして、日常を安心して過ごし、遊ぶことが楽しいという心情が育つ時期を待つ必要があると考える。

多くの保育現場では、2歳児に進級してすぐの4月から8月の時期は、新しい環境の中で情緒を安定させ、安心して遊びを自由に楽しんで行けることを目標にしながら保育を進めている。

このような保育の積み重ねによる効果は、子どものさまざまな発達を確実にしていくものである。保育者の言葉かけの内容がほぼ理解でき、投げかけられた言葉から自己の体験をイメージとしてあらわせるようになるのがおおむねこの頃であると考え9月に「草むらごっこ」を開始してみたの

である。

表現題材の特徴としては、動きの提示をしながら、オノマトペ（擬音・擬態語）をくっつけていく方法をとれる題材を選ぶ。

例えば、「ピヨン・ピヨン」と言いながら両足ジャンプを体験できるようにする。このとき保育者は、「ピヨン・ピヨン」と言いながら、太鼓やタンブリンで跳びやすい音をくっつけて跳んで両足ジャンプの動きを例示する。

子どもは、視覚・聴覚・身体感覚を味わい、両足跳びができる身体機能を身につけられるようになると考える。「ピヨン・ピヨン」という題材は、両足跳びの発達を獲得できる題材となると考える。

「ゴロゴロ」は転がる、「ドチン」はしゃがみこむまたは、寝転がるという、言葉と動きを結びつけていける題材であり、草むらから太鼓やタンブリンの音で広場に誘導し、「ピヨンピヨン」「ゴロゴロ」「ドチン」の動きを引き出す遊びとして繰り返すことで、子どもは動きを楽しいと感じる一歩となることが実践場面での子どもの姿から確認できた。

次に、「走れ、走れ」「広場で踊る」は、獲得した身体機能を思う存分使い動くことの楽しさを伝えるのに役立つ題材である。

「草むらかくれんぼ」や「おおかみさん」は簡単な追いかけてこの面白さを味わっていけるものである。追いかけられる前に、うさぎやカエルのつもりで動こうとする気持ちと2歳児なりのイメージをわかせる姿が見られる。あらかしと草むらへの駆け込みを組み合わせた遊びは、動きたい欲求を満足させる題材であると考えられる。

この年齢の表現題材特徴は、その子の生活圏に存在する内容を意図的にあらかし、体験に結び付けていくことや繰り返し遊ぶことが、楽しめる要素につながり、表現が高まるものであると考えられる。

知っているもの、イメージしやすいものを投げかけ動いて遊ぶことが、みため、つもり、なりきりを楽しむことに発展できるので、動きの特徴が

はっきりしている題材を選ぶことが動きを表しやすいのだと考えられる。

2) 3歳児の表現題材の検討および考察

3歳児の4月では、草むらの出入りの面白さを体験しつつ、オノマトペを使って動きを楽しむことを繰り返す遊びを中心に行った。身体表現として「草むらごっこ」ができた子どもたちは、2歳児のときの保育のなかで「草むらごっこ」を体験してその楽しさをよく知っていることが条件となる。なぜなら、体験のない子が「草むら」を理解するのにやや時間を要するのである。その背後には、2歳児の保育の豊かさも影響することも確認できた。さらに、3歳児クラスは全員が進級児とは限らず、3月までを家庭で過していた子も存在するということを考慮する必要がある。上記において、「草むらごっこ」を理解するのにやや時間を要するわけはここに存在する。

従って、4月、5月の題材は、表現を引き出す前段階の遊びを「草むら」を拠点に、繰り返してできる遊び題材を選ぶとよい。

「ピヨン・ピヨン・ピタ」は、ピヨン・ピヨン跳ぶジャンプ遊びを言葉と動作の関連付けをして、楽しむものである。また、「ピタ」は止まることを意味するものである。「草むら」から「ピヨン・ピヨン跳んで出ておいで」と言葉かけをし、草から動きながら広場に出てくるように導くのである。「草むら」にもどる呪文的な言葉を決めておき、保育者がその言葉を言うと子どもは草にもどって行くのである。

草にもどる言葉の例としては、「雨がふってきたよ」、「おおかみが来たよ」「ごはんだよ」「お家にかえるよ」などであり、そのとき遊ぶ子どもたちと決めるのでさまざまに変化するものである。

少し園生活に慣れてきた頃の7月から8月の遊びでは、5・6月の題材を少し変化させながら身近でよく知っている題材を決めてそれらしく動いて遊ぶのである。子どもから身近な題材を引き出すというより題材決めは

保育者が現在のクラスの子どもの発達状況を把握して投げかけていく方がよいと考える。3歳児の思考はまだとても未熟であり、個人差が非常に大きいことを理解したうえで決定していくことが望ましいと考えられる。

9月頃からは、模倣表現を取り入れながら動く題材を決定していくとよい。動き方を人形などで示し、それを取り込み自分の身体をコントロールしながら動く体験を積み重ねていくことで、あらかわし方が理解できるようになるのである。

このことは、身近な友だちの動きを見て自分に取り込む力を育て、この積み重ねが自己表現を確立していくヒントや栄養素になるのであると考えられる。

身近な題材を「草むら」の出入りによって切りかえて楽しむ体験を積み重ねることが動く楽しさに繋がるのである。深く詳しい特徴はまだ、あらかわせない子が多いので、「カエル・うさぎ・へび・バッタ」などの単語とそのもののイメージ特徴を1~2個あらかわす程度を繰り返すとよい。

3月頃には、絵本を媒介にした表現題材を決め、“たまごから生まれて、たまごにもどる”と“身体を丸める、ころころころがって移動する”など動きのくっつけにより次へつなげていくが、同じ動きをちょっとした簡単な動きでつなぎ合わせていくと、よりよい変化を味わえる題材となる。

3) 4歳児の表現題材の検討および考察

絵本や動きを引き出すボールや人形などを例示し表現活動を展開すると非常に楽しめる。

「たまごのなかから」のように“たまご”そのものを表現題材にすることやその中に何が入っているのかを想像し、表現題材を生み出すような方法もある。4歳児は、思考力も身体機能もかなり育ってくるので、子どもから表現題材を引き出したり、ヒントを出したりして、動きの特徴をあらかわしていけるようにすることも必要である。

自分の考えや工夫した動きを“認めてもらえた”という状態は、以後、さらに考えたり工夫したりする活力になる。新聞紙・ボール・人形・友だち同士などの動きを見て模倣し、安心して動くことで、動き方を身につけ、次の動きを生み出す土台となっていくのである。その季節ならではの感覚的な動きの体験も少しずつ取り入れていくことも必要である。

例えば、季節や感覚を味わえるものをあげてみると、氷る→溶ける、ふくらむ→しぼむ、ふわふわ、ニョキ、モコなどである。このように目に見えないものも表現題材として、あらわす体験をつみ重ねていくことも、感じる心を育てるのに役立つ題材の提供となる。

4) 5歳児の表現題材の検討および考察

5歳児は、身体機能が大変高まり、動きにスピードがついてくる時期である。逆に、スローモーションなどの動きを取り入れ、“ゆっくり”や“そおと”など、動きを制御する体験は自己制御能力を身につけ、コミュニケーション力を高めていくことにつながるので、意識して提示する題材である。

美しい動きや洗練された動きは、繰り返し遊ぶ体験の積み重ねにより、あらわせるようになってくる。「草むら」を利用して、同じ動きを繰り返し体験的に使える題材を選ぶとよいことがわかった。

だんご虫やカエルなどは、そのものの動きの特徴を思考し、あらわすことで動きにも工夫力がつくようになる。自分らしい動き、他児にない動きをあらわすようになるには、思考することが認められることや共感されることへの快感を味わう体験が得られることが条件になる。この体験の繰り返しは、自分なりの動きを発信してくるようになるので大事にしたいと考える。

また、仲間とともに1つの表現を協同できる状態になる題材を提供する必要がある。

4月にあげた、「たまごの中か」では、生まれ育つ成長ストーリーを体験しながら、おたまじゃくしからカエルへの表現をその時々や動きの変化であらわせるような題材選びをし、細切れ体験を繰り返すとその後流れを完結できる物語的表現をより楽しめる状態が現れるのである。

これらの体験を繰り返し、紡ぐことによって、劇遊びへの移行がスムーズになったり、あらかし方を工夫したりできるようになる。ここが育つというより、小さな動きの積み重ねが、お話作りの素地を培っていくのである。よく動くことで気持ちを開放させられるようになる。考えたり、工夫したりすることの面白さや喜びを実感できるようになる。このような5歳児には、体験の積み重ねができる流れをもった題材を子どもと共に選ぶよう心がけていくことが要求される。

5. おわりに

身体表現の遊びは、多くの領域を集結させ子どもが育まれる要素を内在しているものである。子どもたちの笑顔や元気がこの保育を展開するとたくさん味わえ、保育展開中に、今、このときの子どもの育ちを確認することができるのである。

「草むらごっこ」は、多くの学びを提供できる総合的遊びだと考える。身体表現の遊びと一言にあらわしても内容は豊富で、その遊びの保育への取り入れ方や考え方もさまざまであり、多様性とんでいる。筆者は、「草むらごっこ」と名づけ保育実践の場に紹介し、現場の保育者の保育方法の1つとして提案してきた。また、苦手意識から避けて通ってきた保育者の身体表現保育へのハードルを「草むら」を使ったことで低くでき、環境による保育の一方法としても発信し、実践への手がかりを提供できたのである。

保育現場において、「草むらごっこ」の保育実践への評価を実感し、身

身体表現遊び「草むらごっこ」の保育実践からの検討

体表現の保育展開の中で「草むら」を活用する保育者が増えてきていることから、今後も「草むら」を使った保育内容の工夫を行い、さらに動きを引き出す実践を探究していきたいと考えている。

参考文献

- (1) 厚生労働省告示『保育所保育指針』フレーベル館（2008年）pp. 10-11
- (2) 西洋子他：『子ども・からだ・表現～豊かな保育内容のための理論と演習～』市村出版（2003年）
- (3) 那須川知子・高橋敏之編著：『保育内容「表現」論』ミネルヴァ書房（2006年）
- (4) 花原幹夫編：『保育内容表現』北大路書房（2006年）
- (5) 榎沢良彦編：『保育内容・表現』同文書院（2007年）
- (6) 佐伯胖・藤田英典・佐藤学編：『表現者として育つ』東京大学出版会（1995年）
- (7) 北野幸子・角尾和子・荒木紫乃編著：『遊び・生活・学びを培う教育保育の方法と技術・実践力の向上をめざして』北大路書房（2011年）
- (8) 加藤繁美他：『5歳児の協同的学びと対話的保育』ひとなる書房（2005年）
- (9) 青木理子他：『豊かな感性を育む身体表現遊び』ぎょうせい（2011年）
- (10) 平田智久・小林紀子・砂上史子：『保育内容「表現」』ミネルヴァ書房（2011年）
- (11) 久富陽子・梅田優子：『保育方法の実践的理解』萌文書林（2008年）
- (12) 今井和子監修：『2歳児の育ち辞典』小学館（2009年）
- (13) 本山益子・平野仁美：「身体表現遊びの保育内容の検討—2～5歳児クラスでの「草むらごっこ」の実践から」『日本保育学会第64回大会論文集』（2011年）p. 294
- (14) 平野仁美：「子どもの身体表現を支える人的環境」『日本保育学会第60回大会論文集』（2007年）pp. 908-909
- (15) 高家博成・中川道子：『ころちゃんはだんごむし』童心社（1998年）
- (16) 谷川俊太郎・元永定正：『もこもこもこ』文研出版（2005年）
- (17) 元永定正：『がちゃがちゃどんどん』福音館書店（2009年）

※ 同朋福祉編集委員会規定により「実践・調査報告」としての査読済み

（平野仁美：本学専任講師・保育原理、保育内容総論）

（富山幹子：豊川市立一宮保育園園長）